

平成 30 年 6 月 12 日現在

機関番号：32641

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2017

課題番号：25770254

研究課題名(和文)18-20世紀中央アジアにおけるナクシュバンディー教団改革派の発展に関する研究

研究課題名(英文)Research on the development of the Naqshbandiyya reformist group in Central Asia during the 18-20th centuries

研究代表者

河原 弥生 (Kawahara, Yayoi)

中央大学・文学部・特別研究員

研究者番号：90533951

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、18-20世紀初頭のフェルガナ盆地におけるムジャッディディーヤの拡大の過程と他のナクシュバンディー教団の勢力との関係を、マザールでの聞き取り調査と民間所蔵史料の分析によって検討した。

ムジャッディディーヤのフェルガナ盆地での発展には、ダフベード派が決定的な役割を果たしたことが確認された。その特徴は、当時のタリーカに一般的だった世襲の後継ではなく、師弟関係による後継である。一方で旧来の勢力マフドゥームザーダも社会的影響力を保持していた。ナクシュバンディー教団の諸派は地域社会においてなんらかの共存関係にあったと考えられる。

研究成果の概要(英文)：This research project has examined the process of the expansion of the Mujaddidiyya and its mutual relationship with other Naqshbandi groups in the Ferghana Valley during the eighteenth and the beginning of the twentieth centuries, by field research at mazars and analysis of privately held historical materials.

It was confirmed that the Dahbed group played a decisive role in the development of the Mujaddidiyya in the Ferghana Valley. The characteristic point of its group is the master-pupil succession, not the hereditary succession that was common in tariqas at that time. On the other hand, the old groups, such as Makhdumzada, maintained their social influence. The various factions of the Naqshbandiyya were probably in some kind of coexistence state in the local community.

研究分野：中央アジア史

キーワード：タリーカ ナクシュバンディー教団 ムジャッディディーヤ 中央アジア ロシア フェルガナ コーカンド ブハラ

1. 研究開始当初の背景

ティムール朝期以降中央アジアのイスラーム諸政権において、ナクシュバンディー教団をはじめとするタリーカの指導者たちが各政権の中核部で重要な位置を占めたこと、また、中央アジアがロシア帝国と清朝に併合されたのちは、タリーカが異教徒の支配に対する「聖戦」の中心的存在であったことはよく知られている。にもかかわらず、このテーマは、政治的イデオロギーの制約や現地語原典史料の研究の不足などにより、長らく研究の立ち遅れた分野であった。

ソ連崩壊後の中央アジア諸国では歴史の見直しが進み、タリーカ研究も進展しつつある。とりわけインドで興ったナクシュバンディー教団の改革派ムジャッディディーヤの中央アジアへの伝播を扱ったキューゲルゲン「18-19世紀初頭の中央アジアにおけるナクシュバンディーヤ・ムジャッディディーヤの発展」(『ロシアと中央アジアにおけるイスラーム文化』2巻、ベルリン、1998年所収)や、ウズベク部族の政権下におけるイスラームを論じたババジャノフ『コーカンド・ハーン国：政権、統治、宗教』(東京-タシュケント、2010年)のような研究が現れ、中央アジアのタリーカ研究は新たな段階に入った。

また近年は中央アジア現地での調査が可能となり、新史料の開拓も進んでいる。例えば、研究代表者が参加した国際共同研究では、フェルガナ盆地において、網羅的なマザール(聖者廟)の調査と民間所蔵史料の収集が行われた。その結果、特にタリーカに由来するマザールの全体像がかなりの程度明らかとなったほか、系譜書、教団の修行修了を認める免許状、タリーカ道統図、弟子のリスト、聖者伝などのタリーカ内部の史料が民間から発見された。さらに史料所蔵者からの聞き取り調査により口承の情報も得られた。

研究代表者は、これらの新発見史料を活用して、フェルガナ盆地で活動したナクシュバンディー教団諸派に関する研究を続けてきた。とりわけ、同教団の16世紀の有力な指導者マフドゥーム・アアザムの子孫一族であるマフドゥームザダの権勢に着目し、これまで東トルキスタン史の枠組みの中でのみ捉えられてきたその一派、カシュガル・ホージャ家のメンバーが、17世紀末に東トルキスタンで政治生命を断たれた後、18世紀のうちにフェルガナ盆地に移動して勢力を拡大し、19世紀にはコーカンド・ハーン国政権にも参画して長らく政治的社会的影響力を行使したことを明らかにしてきた。また民間所蔵の免許状の比較検討により、19-20世紀にはフェルガナ盆地においてもムジャッディディーヤに属する一派の活動が見られたことも解明した。

しかしながら、中央アジアのタリーカ研究は近年急速に進展しつつあるものの、未だ、ウズベク政権からロシア帝国への併合、ソ連邦の成立という18-20世紀の政治的激動の時代における、旧来の勢力と新参の改革派との間の相克関係、言い換えればナクシュバンディー教団と総称されるタリーカの変容を理解できる段階には至っていない。その大きな原因は、18-20世紀のムジャッディディーヤの興隆がイスラーム世界に広くみられる注目すべき現象であるにも関わらず、同派の中央アジアでの活動の全体像が解明されていない点にある。このような背景から、ムジャッディディーヤの中央アジアへの発展過程を明らかにする必要があると考えた。

2. 研究の目的

上述の背景を踏まえ、本研究はムジャッディディーヤの中央アジアでの活動の全体像を解明することを目的とする。ムジャッディディーヤは、創始者ホージャ・アフマド・スィルヒンディー(1624年没)の死後まもなく、二人の息子ムハンマド・サイードとムハンマド・マアスームがそれぞれ率いる二つの分派に分かれた。そのうち、ムハンマド・サイード派は、サマルカンド出身のムサー・ハーン・ダフベディーがその教義を学び伝えたことにより(ダフベード派)、またムハンマド・マアスーム派は、ミヤーン・ファズル・アフマドをはじめとするスィルヒンディーの子孫たち(ミヤーン派)がブハラ・アミール国へ布教のために到来したことにより、双方ともに中央アジアに伝わっていたことが先行研究からわかっている。

また研究代表者のこれまでの研究の過程で、ダフベード派は19世紀初頭の指導者ハリファ・ムハンマド・フサインやその弟子のマジュズーブ・ナマンガーニーによりフェルガナ盆地に急速に拡大したこと、その一方で、ナクシュバンディー教団の故地である中央アジアには、旧来の勢力も多く存在し、とりわけフェルガナ盆地には複数のマフドゥームザダが地盤を築いて活動していたことが明らかとなっている。さらに、フェルガナ盆地を支配したコーカンド・ハーン国の史料にはミヤーン派の指導者たちの活動についても記述がある。ならば、この地でのムジャッディディーヤの拡大過程においては各派間および旧来の勢力との何らかの相克、あるいは共存の関係があったはずである。このことは、ナクシュバンディー教団の従来のある方に変化を生じさせたと考えられる。その具体的様相を明らかにするため、本研究はムジャッディディーヤ各派の拡大過程と、旧来勢力との関係を示すことを目指す。

3. 研究の方法

ムジャッディディーヤの拡大過程を明らかにするためには、中央アジア全域を視野に

入れなければならないが、ナクシュバンディー教団の旧来の勢力の活動がかなりの程度明らかになっているフェルガナ盆地はとりわけ好適な分析対象となる。また、ムジャッディディーヤ諸派のうち、未だ十分に研究の対象となっていないミヤーン派に関して重点的に調査を進める必要がある。

このような諸条件を踏まえて、本研究では以下のような方法で調査、分析を進める。

1) 現地のマザールを足がかりとして各派の子孫を見つけ出し、彼らからマザールの歴史、被葬者に関して聞き取りを行う。対象とする時代が比較的最近であるため、歴史研究上有意義な伝承を得られると見込まれる。主な調査候補地は、コーカンド・ハーン国の拠点フェルガナ盆地と、プハラ・アミール国の主要都市プハラ、サマルカンドである。なお、フェルガナ盆地は現在では、ウズベキスタン、タジキスタン、クルグズの3カ国に分断されているが、このうち、コーカンド、ナマンガン、アンディジャン等の主要都市を領域に含むウズベキスタンが調査の中心となる。

2) 史料収集

上述のマザール調査のもう一つの大きな目的は、そこに所蔵されている学界に未知の史料の収集である。被葬者の子孫たちは、系譜書、教団の免許状、ハーン国君主から発行されたマザール管理人任命書や免税証書、あるいは聖者伝など、一族の権利、権威を証明する史料を所蔵していることが多い。このような多類型の史料は、由来が明らかである上、タリーカの内部資料であるという点で極めて史料価値が高い。

同時に各国の研究機関に所蔵される聖者伝や文書の研究にも力を入れる。ムジャッディディーヤ、とりわけミヤーン派の指導者たちの道統を明らかにする道統図や、ロシア統治時代の同派の指導者に関する調査報告書等を収集する。

3) 収集史料の分析

民間所蔵史料は上述のように歴史研究上非常に価値の高い史料であるが、年代記や聖者伝等と比較検討され、厳密な史料批判を経てはじめてその真価を発揮できる。特にマフドゥームザーダの活動に詳しいコーカンド・ハーン国の歴史書『選史』や、各派の指導者の聖者伝を照合しながら、発見史料を分析する。

4. 研究成果

本研究では、ムジャッディディーヤの中央アジアにおける拡大の過程と旧来の勢力との関係を検討した。

平成 25 年度は、ムジャッディディーヤ諸派のうち、ナクシュバンディー教団の修行法

として一般的な無声のズィクル(称名)ではなく、有声のズィクルを行う分派あるいは指導者が存在したことに着目して教団の道統の分析を進めた。特に有声のズィクルを行う者たちが、それを特徴とするカーディリー教団からの系図を併せ持つ可能性を検討した。(「19世紀のフェルガナ盆地におけるムジャッディディーヤ：声高ズィクルをめぐるファトワーの紹介」アフマド・スィルヒンディーとムジャッディディーヤの調査研究研究会)

これに関連して、ウズベキスタンのフェルガナ州およびアンディジャン州において、ムジャッディディーヤ諸派の指導者に関する現地調査を実施し、ムジャッディディーヤのシャイフたちの道統図、免許状、同派の経済活動を示す土地売買文書等の民間所蔵史料と口承伝承を収集することができた。これらの史料の分析からは、19世紀のフェルガナ盆地におけるムジャッディディーヤの主流派がダフベード派であることが強く示唆された。系統的な史料が十分ではないタリーカの研究における民間所蔵史料の重要性が再認識された。(「中央アジア・イスラーム史：民間所蔵史料による研究の可能性」『歴史と地理：世界史の研究』238号、2014年2月、48-51頁)

平成 26 年度は、19 世紀半ばにコーカンド・ハーン国領内でのムジャッディディーヤの発展に大きな役割を果たしたダフベード派の指導者、マジズーブ・ナマンガーニーの活動とその後継者に着目して検討を進めた。当該時期に作成された教団の免許状や道統図によると、マジズーブ・ナマンガーニーは、ムジャッディディーヤを含む4つの教団の指導者であったとされるが、他の教団のうちとりわけカーディリー教団が重視されており、自らの教団をカーディリー教団と称する場合もあったことがわかった。このことは、彼らの教団が有声のズィクルをも行っていたことと密接に関係する可能性が高い。

また、この問題に関連して、ウズベキスタンで現地調査を行い、カーディリー教団に属する系譜史料を入手するとともに、マジズーブ・ナマンガーニーの高弟の一人ハキーム・ハリーフアに関して、その子孫から20世紀初頭の具体的な教団活動の様相を聞き取った。その結果、彼らがロシア帝国統治期の20世紀の初頭にいたるまでフェルガナ地域社会において活発な布教活動とともに盛んな経済活動を行っていたことが明らかとなった。さらに、ミヤーン派の子孫にも面会し、史料を入手した。聞き取り調査からは、この一族の子孫たちもまた19世紀末から20世紀の初頭にかけての同じ時期にフェルガナ盆地全域に移住し布教活動を進めたことがわかった。このように、フェルガナ盆地においてはムジャッディディーヤのいくつもの分派がそれぞれに活動を展開していたが、一方でフェルガナ州のある村の調査からは、

狭い地域範囲において旧来のマフドゥームザードとムジャッディディーヤのシャイフが並存して活動する事例を確認することができた。(「19-20 世紀フェルガナ盆地におけるムジャッディディーヤ：ムジャッディディーヤ科 研究ウズベキスタン調査報告」アフマド・スィルヒンディーとムジャッディディーヤの調査研究研究会)

平成 27 年度は、これまでに収集した史料の分析を進めた。とりわけ、19 世紀前半にブハラ・アミール国からフェルガナ盆地にムジャッディディーヤを広めたダフベード派のキーパーソン、ハリーファ・フサインとマジズーブ・ナマンガーニーについての史料の情報を分析した。後者の弟子たちは、後に東トルキスタンにおいてムジャッディディーヤの教義を広めたが、その過程からは、マジズーブ・ナマンガーニーが、有声のズィクルも日常的におこなっていたため、彼を通じる系統が、結果的にナクシュバンディー教団の中の別の系統であるかのように継承されていくケースも見られた。(“The Development of the Naqshbandiyya-Mujaddidiyya in the Ferghana Valley during the 19th and Early 20th Centuries,” *Journal of the History of Sufism*, No. 6, pp. 139-186)

平成 28 年度は、ウズベキスタンで、ムジャッディディーヤの一大勢力が存在したナマンガンにおいて、19 世紀半ばの中心的指導者、マジズーブ・ナマンガーニーのマザールと子孫たちを訪ねた。そこで、マジズーブ・ナマンガーニーの詩集と考えられる写本、子孫に関連する免許状等の文書を複写できた。また聞き取り調査から、マジズーブ・ナマンガーニーの孫がナマンガン市内にハナカーフ(修道場)を建てて布教に従事したこと、そのハナカーフはナマンガンでよく知られた著名な建造物であり、この一派がナマンガンにおいて後代まで一定の存在感を示し続けたことがわかった。このほか、フェルガナ盆地内で免許状、信者のリスト等の教団に関連する史料を収集した。

また、イギリスの大英図書館とオックスフォード大学ボードリアン図書館、ドイツのベルリン州立図書館において、インドにおけるムジャッディディーヤ関連史料を収集した。

平成 29 年度は、新興のムジャッディディーヤとの比較対象として、旧来のマフドゥームザードの活動について整理した。18-19 世紀の中央アジアにおけるマフドゥームザードの活動について豊富な情報を伝える史料、ムハンマド・ハキーム・ハーン著『選史』の分析のため、イランで現地調査と史料収集をおこなった。本史料に含まれる著者のメッカ巡礼記のイラン滞在記録には、マフドゥームザードの有力な指導者の家系に生まれた著

者の目から見た当時のシーア派とスンナ派の確執が鮮明に描かれており、ナクシュバンディー教団が是としたスンナ派主義を伺うことができる。一方で著者は各地で著名なシーア派の聖地の参拝もおこなっており、当時の両派の関係性はより慎重に評価されるべきである。

また、ムジャッディディーヤの興隆の一方で、地域社会におけるマフドゥームザードの存在感も持続していた。コーカンド・ハーン国末期には、ロシア帝国軍の侵入に対する民衆蜂起においてマルギランのマフドゥームザードの一員が決定的な役割を担ったことを明らかにした。(Vali Khan Tura: A Makhdumzada Leader in Marghinan during the Collapse of the Khanate of Khoqand, Devin DeWeese and Jo-Ann Gross (eds.), *Sufism in Central Asia: New Perspectives on Sufi Traditions, 15th-21st Centuries*, 2018)

総じて、ムジャッディディーヤの拡大過程を多くの具体的事例に基づいて検討することができた。本研究の成果として、ムジャッディディーヤの発展に、ダフベード派が圧倒的に大きな役割を果たしたことが解明された。フェルガナ盆地での布教には同派のマジズーブ・ナマンガーニーが大きく貢献したが、有声ズィクルを取り入れた彼の一派は、時にはカーディリー教団の名称も帯びつつ新たな分派として認識されて広まったことも明らかになった。

このムジャッディディーヤの主流派の拡大過程をマフドゥームザードなどの旧来の勢力と比較した時、最も際立った差異は、大多数は血縁のない師弟関係が築かれている点であろう。多くのタリーカに世襲の後継が一般的となっていた中、本来の純粋な師弟関係による後継は、中央アジアの新しい時代のナクシュバンディー教団の特徴として提示することができるであろう。

しかし、マフドゥームザードが 19 世紀末にも民衆蜂起を主導するだけの社会的影響力を保持していた例に見たように、フェルガナ盆地においては血統主義の旧来の勢力も衰えてはいなかった。さらにムジャッディディーヤの一派であるミヤーン派もまた、血統主義を一つの特徴としており、独自の布教活動をおこなっていた。従って、ダフベード派の興隆によって他の諸派が衰退したとは言いがたく、むしろ、諸派が狭い地域社会に共存していたと考えられる事例も見出すことができた。

本研究ではムジャッディディーヤおよびナクシュバンディー教団に関する多くの貴重な民間所蔵史料を発見し、分析することができたが、他派との相互関係に言及することがほとんどないこれらの史料の性格上、諸派

の相互関係についてはさらなる検討の余地が残った。また、中央アジアにおけるカーディリー教団の活動の実態について解明することが、18-20世紀の中央アジアのタリーカの姿を明らかにしていく上で重要な課題となるであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 9件)

Kawahara Yayoi, Vali Khan Tura: A Makhdumzada Leader in Marghinan during the Collapse of the Khanate of Khoqand, Devin DeWeese and Jo-Ann Gross (eds.), *Sufism in Central Asia: New Perspectives on Sufi Traditions, 15th-21st Centuries*, 2018, (掲載決定) 査読無

河原弥生「19～20世紀前半における右岸バダフシヤンのイスマール派信徒たち：アーガー・ハーンとの交渉を中心に」『日本中央アジア学会報』12号、2016年、40-42頁、査読無

川本正知、和崎聖日、河原弥生「フェルガナ盆地のムジャッディディーヤ：ムジャッディディーヤ科研ウズベキスタン調査報告：ムジャッディディーヤのフェルガナ盆地への伝搬」『日本中央アジア学会報』12号、2016年、52-53頁、査読無

河原弥生「第5回イスラーム地域研究国際会議 in 東京：国際会議を振り返って」『イスラーム地域研究ジャーナル』8号、2016年、131-132頁、査読無

Kawahara Yayoi, The Development of the Naqshbandiyya-Mujaddidiyya in the Ferghana Valley during the 19th and Early 20th Centuries, *Journal of the History of Sufism*, No. 6, 2015, pp. 139-186. 査読有

Onuma Takahiro, Kawahara Yayoi, Shioya Akifumi, An Encounter between the Qing Dynasty and Khoqand in 1759-1760: Central Asia in the Mid-Eighteenth Century, *Frontiers of History in China*, 9(3), 2014, pp. 384-408. 査読有

河原弥生「内陸アジア 二」『史学雑誌 2013年の歴史学界 回顧と展望』123編5号、2014年、261-266頁、査読無

河原弥生「アブデュルレシト・イブラヒム著、小松香織・小松久男訳、『イスラーム原典叢書 ジャポニヤ-イブラヒムの明治

日本探訪記』、岩波書店、2013年7月刊、A5判、540頁、9,400円+税」『内陸アジア史研究』29、2014年3月、154-155頁、査読無

河原弥生「中央アジア・イスラーム史：民間所蔵史料による研究の可能性」『歴史と地理：世界史の研究』238号、2014年2月、48-51頁、査読無

[学会発表](計 6件)

Kawahara Yayoi, Historical sources on the Khanate of Khoqand: Focused on the activities of Naqshbandiyya, 台湾國立政治大學民族學系專題演講, 2018年3月23日、台湾國立政治大學民族學系

Kavakhara Yayoi, K izucheniiu dokumentov iz chastnykh arkhivov po istorii ismailitov v Badakhshane (ロシア語), 中央アジア研究セミナー、2016年6月23日、東京外国語大学

河原弥生「19～20世紀前半における右岸バダフシヤンのイスマール派信徒たち：アーガー・ハーンとの交渉を中心に」日本中央アジア学会年次大会、2016年3月27日、KKR江ノ島

川本正知、和崎聖日、河原弥生「フェルガナ盆地のムジャッディディーヤ：ムジャッディディーヤ科研ウズベキスタン調査報告」「ムジャッディディーヤのフェルガナ盆地への伝搬」、日本中央アジア学会年次大会、2016年3月28日、KKR江ノ島

河原弥生「19-20世紀フェルガナ盆地におけるムジャッディディーヤ：ムジャッディディーヤ科研ウズベキスタン調査報告」科研費「アフマド・スィルヒンディーとムジャッディディーヤの調査研究」研究会、2014年11月14日、京都大学

河原弥生「19世紀のフェルガナ盆地におけるムジャッディディーヤ：声高ズィクルをめぐるファトワーの紹介」、科研費「アフマド・スィルヒンディーとムジャッディディーヤの調査研究」研究会、2013年6月13日、京都大学

[図書](計 1件)

Kawahara Yayoi and Umed Mamadsherdzodshoev, *Documents from Private Archives in a Right-Bank Badakhshan (Introduction)*, TIAS: Department of Islamic Area Studies Center for Evolving Humanities, Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo, 2015, vi+96pp. (pp. 1-19; 48; 54-93)

6 . 研究組織

(1)研究代表者

河原 弥生 (Kawahara Yayoi)

中央大学・文学部・特別研究員

研究者番号：90533951